

○ 授業動画に係る指導及び助言

～延岡市立東小6年 主題名：自分の心に誠実に 教材名『手品師』～

宮崎大学大学院教育学研究科 教授 椋木 香子

1 子どもが「考え」「議論する」ための指導方法の工夫について

【発問構成の工夫】

- ・ 本教材では、主人公の手品師が、夢だった大劇場に行くのではなく、男の子との約束を守る選択をしたことの意味を考えさせることが重要である。そのため、男の子との約束を守った後の気持ちについて、「どんな気持ちだったか」と共感的に問うのではなく、「後悔はなかったか」と客観的に問い、多面的・多角的に考えさせようとしている。

【役割演技の工夫】

- ・ 役割演技は異なる二人以上の人物で行うことが多いが、今回は一人の人物の中での思いを2つの視点から考えさせる方法を用いている。目に見えにくい心の迷いや葛藤を視覚化し、考えや思いを多面的・多角的に捉えるのに効果的な手法の一つである。また、ペアで両方の役割を演じることで、両方の立場に立って考えを深めることができる。

【ICT活用の工夫】

- ・ 主人公の気持ちを視覚化する心情円盤（ハート型）を活用する際、ロイロノートを使って表現させ、共有させている。今回は色の割合が数値化して示される思考ツールを活用しているので、数値をポイントにして指名をしたり、数値の違いを説明させたりすることで、児童の多様な表現を促している。

2 ねらいに関する児童の姿について

- ・ 全員が両方の立場で役割演技をすることを通して、児童たちは手品師が深く悩んだ上で男の子との約束を守ることを選択をしたことを実感することができたと思われる。
- ・ 「自分自身に対して誠実に生きようとする態度」にまでつなげて考える児童は少なかったと思われる。しかし、「誠実である姿」が、この物語では男の子との約束を守ることであったことは理解したのではないかと思われる。

3 指導及び助言

- ・ 悩んだ末に男の子との約束を守った手品師に後悔はなかったかを問う際、学習指導過程の指導上の留意点では、「モヤモヤが残っていることが悩みであり、それが誠実に生きたいという悩みである」ことを理解させようとしているが、物語上の手品師は選択した後には迷いが無い。つまり、発問の内容（手品師の思い）と気づかせたい内容（誠実に生きることの難しさ）にずれが生じており、ねらい通りに深めることができなかつたと考えられる。誠実に生きることの難しさは、児童自身が「手品師の立場になったら」と考えることで出てくる。
- ・ 「一人の約束を破るなら、大劇場にはまだ立てない」という児童の発言を受け、他の児童が「約束を破って夢を叶えても、男の子は喜ばない」と発言している。ここに「なぜ約束を守るのか」という理由が表れているので、問い返しをして深めると良かった。